

平成 20 年 5 月 18 日

国際博物館の日 新聞・5月18日

vol.01
創刊号

※「国際博物館の日」は 1977 年に国際博物館会議 (ICOM) の総会で決議され、翌年から実施されている世界的な博物館の記念日です。

「国際博物館の日」を盛り上げよう！



- 「国際博物館の日」を盛り上げよう！ 宇仁 義和
- 国際博物館の日新聞発行に寄せて 清水 麻記
- 心にのこった海外・日本のミュージアム
 - どんなきもユーモアの精神をもって！：ナショナル・スコットランド博物館 井上 由佳
 - みんなの想像力の入口でありつづける 国立科学博物館 内尾 優子
 - 鹿児島県立博物館 江藤 信一
 - The City Museum: St Louis, Missouri, United States Kim Koin
 - スイス・ベルン自然史博物館 木村 政司
 - 山の中での予期せぬ出会い〜デンバーアートミュージアム〜 清水 麻記
 - モントレー湾水族館 (アメリカ) 高田 浩二
 - ダイノソア・ファクトリー 田中 広樹
 - ボストン科学博物館 平井 康之
 - 西宮市貝類博物館 松隈 明彦
 - 旭山動物園 三宅 基裕
 - あこがれのアメリカ自然史博物館 渡辺 政隆
 - 九州大学総合研究博物館 三島 美佐子

「国際博物館の日」を盛り上げよう！

遠く北海道から寄稿しています。なぜ、今年は九州大学で「国際博物館の日」にニュースレターを出したのか、その訳を「言い出しっぺ」からご説明いたします。

「国際博物館の日」は 1977 年に国際博物館会議 (ICOM) の総会で決議され、翌年から実施されている世界的な博物館の記念日です。しかし、日本ではその意義や存在はほとんど知られていません。それは博物館の関係者にも責任があります。じつのところ、自分自身、現役の学芸員時代はこの日を無視していたのです。日常業務で手一杯の地方博物館にとっては、ICOM の存在など頭の片隅にもなかったのです。

ところが去年のこの日、NHKBS ニュースが伝えた北京からのトップニュースが「国際博物館の日」の記念事業でした。もちろん北京オリンピックに向けての当局の宣伝でもあったのですが、よい意味での建前であり、啓蒙でしょう。ICOM についても同様で、会員にもなり情報収集をしていくと、途上国を含め先導的役割を果たそうとしていることがわかりました。もしかしたら日本だけ取り残されているのではないか、そんな思いになったのです。

そこで、勝手に「国際博物館の日」を盛り上げる、それを利用して各自の博物館を宣伝する／博物館を応援することを諸君、しようではないか、というメールをごく少数の知人に送ることを始めたのでした。現在、日本の博物館業界、学芸員の思考はあまりに内向きです。この日を使って閉塞感を打破する第一歩にしようではないか、と。

ために ICOM のウェブサイトを見ると、この日の活動例が紹介されています。無料入館やバックヤードツアーなど一般向けの行事に加え、博物館や専門職員どうしの交流や研究会、行政や議員など設置者や意思決定機関に向けたアピール活動も載っていて、日本で想像する記念行事以上の広がり描かれています。母の日やバレンタインデーのように、なかなか日頃は感謝の気持ち？を示しにくい相手に対して、言葉を伝える日でもあるようです。

それから、アメリカ博物館協会 (AAM) の「国際博物館の日」活動事例集も案内されていて、1冊5ドルという値段だったので、試しに買ってみました。中身は、実際のプレスリリースやチラシのコピー集で、安上がりな冊子でしたが、たくさんの資料が集まるのは、現場の博物館の活動が活発で、かつ、AAM に求心力と実行力があるからでしょう。

そのチラシを見ていて思ったことは、celebrate の意味するところです。参加・一緒・やろう、というイメージで受け止めました。主催する博物館とそこに参加する市民／住民／一般のひとたち（日本語によい書き言葉がない）、が対等のように感じられるのです。この日の下には平等だと。未熟な英語感覚がそうさせるのかも知れませんが、日本語の、祝賀・記念とはどうも違った語感です。すべてが上下関係を基本とする書き言葉の日本語がうとましい。大和言葉あるいは方言であれば上手に表現できそうですが。

ところで、ICOM は国際博物館の日への参加を「地球規模の博物館コミュニティ」に呼びかけています。しかし、日本に博物館

コミュニティは存在するのでしょうか。博物館はそれぞれが特殊で、他の館とよい関係を作り、それを続けることがなかなかできません。学芸員どうしの付き合いは濃密ですが、組織としての関係は断ち切れています。日本の博物館コミュニティは実態としても感覚的にも存在しないでしょう。

それでも、美術館や水族館などは業界があり、コレクションや雑誌といった商品や市場が形成されているように思えます。一般の人からしても、おしゃれでデートにも使え、感性的な会話が弾む、館が募集する写真や作品展への応募、あるいは個人の創作の提供といった参加ができるのです。

問題が深刻なのはオーソドックスな博物館です。ここには商品市場も参加もできていません。ここに現在の危機があるのではないのでしょうか。対処の方法として、子どもや一般に向けての普及活動の重視、博学連携などの動きがあるのでしょうか、本質的な解決策は別の場所にあるように思えてなりません。

そんななか、三木美裕さんの『キュレーターからの手紙～アメリカ・ミュージアム事情～』（アムプロ・モーション、2004 年）が目にとまりました。買ったままで読んでいなかったのですが、中身を見ると、わが方もですぐにできそうな具体的アイデアがいろいろありました。特定の年齢や観覧者による展示評価、教育用コレクションの抽出、非公式アドバイザーの依頼、(教員との)茶話会、(学芸員ホストの)飲み会、などなど。どれもこれも「国際博物館の日」にもぴったりで、お金が掛からず、すぐにできそうなプランです。

では、なぜ、これまでできなかったのか？それは、博物館、とくに公立館が、観覧者にも自分たちにも平等性や匿名性を求めてきたからではないのでしょうか。税金で運営される博物館にとって「非公式な」依頼や目星をつけた人物を頼った評価はたいへんにしづらい。あの人が適任とわかっていても、相応の役職がなければ選択の理由付けで困ってしまう。学芸員の発想は規則の前に挫折する。博物館は人だ、と言いつつも、個人とのつながりや信頼関係を否定する仕組みが足かせとなる。ここに本当の課題があるのではないのでしょうか。

「国際博物館の日」は何よりも博物館自身が元気になれる、そのきっかけにこそふさわしいのです。上意下達の行事遂行ではなく、館や個人の発案からさまざまな活動が起きてくればと願っています。

北海道では 5 月 18 日は、花見（連休前後）とよさこいソーラン祭り（6 月第 2 日曜日に向かう水～日）の間にあり、「休日は近くの博物館にでも行ってみよう」という気分になる日です。愛鳥週間（5 月 10-16 日）の直後ですので、国民的には野外活動や運動の時期ですが、「国際博物館の日」が初夏の文化の日というような位置付けで定着してくことを期待しています。

独立学芸員・東京農業大学生物産業学部嘱託准教授 宇仁義和
(うに・よしかず) unisan@m5.dion.ne.jp

■ 国際博物館新聞発行に寄せて

国際博物館の日が5月18日であることは、数年前に上野の博物館に勤務していた時に知った。しかし、地方では些か盛り上がり欠けるという、国際博物館の日の盛上げ隊長宇仁さんの呼びかけに同じく思うところがあり、博物館を楽しむ人たちでパーティーをする企画を企んでいたが、あいにく日曜日は皆忙しくパーティーが成立しないので、新聞をつくることにした。短期間の呼びかけに応じたくださった方々に、心から感謝している。この短期間に応じたくださった方々というのは、5月GW後にアメリカの学会から帰った清水と何らかの連絡をとったために、予期せず頼まれてしまったアンラッキーな筆者の方々である。しかしながら、本紙を手にとる方は非常にラッキーな方々である。なぜなら、この国際博物館新聞創刊号ひとつで、たくさんの博物館巡礼者の方々の心に残るミュージアム情報を得ることができるからだ。私のように無名の者のミュージアム体験もまざってはいるが、寄稿者のすばらしい体験を通して5月18日が「国際博物館の日」であることに思いを馳せていただき、国をこえて存在するミュージアムというものを生活の1シーンに取り入れていただきたいと願っている。このような草の根的ミュージアム促進活動にご賛同いただいた執筆者の方々、そして読者の皆様、新聞発行・デザインを快く引き受けくださった黒澤茂樹（発行所：nidone design）さんに御礼申し上げます。

発行人 九州大学ユーザーサイエンス機構ミュージアム研究会 清水 麻記

心 にのこった海外・日本のミュージアム

■ どんなときもユーモアの精神をもって！：ナショナル・スコットランド博物館

近年、歴史ある博物館を大改装して、人々の好奇心をかき立て、世界の文化や歴史、自然科学などを積極的に学び、実りある時間を過ごしてもらおう場所にしていく動きが見られます。例えば、エディンバラにある、ナショナル・スコットランド博物館もその一つです。この写真は同博物館のリニューアル工事中の岩石コーナーの入口です。通常、博物館で工事をしている場合、看板には「現在、展示室は改装工事中です。ご迷惑をおかけして申し訳ありません。」といったフレーズが一般的

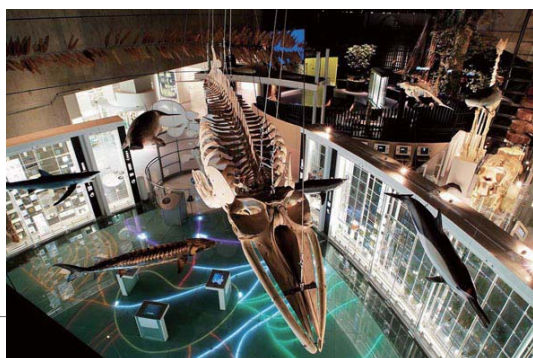


ですが、この博物館は違います。最初に「私たちの岩石たちは休暇を取ってお出かけしました。その間、私たちは彼らのためにもっといいお家を作っています。」とあります。さらに、下の4枚の白い部分は、世界各地に出かけた岩石からの葉書になっています。例えば、「僕は今日、火山の噴火口に来たよ。危うく火口に落ちちて溶かされちゃうところだったよ！」といった具合です。

この入口を見かけた人々は岩石からの葉書を楽しみ、彼らが2011年に新しい家に戻ってくることを心待ちにするでしょう。さりげないユーモアが、人々を博物館に惹きつける格好の例です。ユーモア溢れる博物館が世界中に増えることを願ってやみません。

文教大学国際学部 井上 由佳

■ みんなの想像力の入口でありつづける 国立科学博物館



国立科学博物館は子どもが見に行くところ！と思っている人がまだ多いみたい。でも、そんなことはありません。大人も、おー！！と驚きを感じられる場所なのです。

太古の生き物の化石や昔の人が生み出した技術とか。宇宙とか、動物のはく製とか。テレビでは見ることがあっても、なかなか直接かかわることが無いものだらけ。博物館で思いっきり不思議を浴びる日があってもいいですね。

国立科学博物館 内尾 優子

鹿児島県立博物館

私の心に残っている博物館は、初めて行った鹿児島県立博物館である。鹿児島県立博物館は鹿児島市の中心地である天文館から歩いて数分の、大変利便性の良い場所にある。約20年前の夏休みの暑い日に、その博物館を訪れた。当時、私は鹿児島市の小学校の低学年で、「博物館」というものがどういうものかもよくわかっていなかったと思う。正直、どんな目的で博物館を訪れたのかは覚えていないが、入ったときの冷房の効いたひんやりとした空気はよく覚えている。施設内には桜島の大噴火を再現したジオラマ、また化石展示には恐竜の骨のレプリカがあり、プラモデル好きだった当時の私は単純にそのジオラマ、恐竜をじーっと見ていた。

その後も、数回、鹿児島県立博物館を訪れ、その都度、新しい発見があった。鹿児島の錦江湾が阿蘇山の大噴火によってできた窪みに海水が流れ込んでできた湾であること、桜島の噴火によって大隈半島と陸続きになったことなど、自分が大きくなるにしたがって、博物館で学べる知識が多くなっていったと思う。

今も変わらず城山公園のふもとにある鹿児島県立博物館は、今も多くの子供達に自然の知をしっかりと伝えていると思う。

九州大学ユーザーサイエンス機構 食と感性プロジェクト 江藤 信一

The City Museum: St Louis, Missouri, United States

As an artist, educator and museum lover, there are museums all over the world that have impressed, surprised and informed me. However, one of the most joyous, visceral museum experiences overall was my visit to the City Museum in St. Louis, Missouri.



I view the City Museum as one of the most impacting museums I have ever been to even though some people may not define the City Museum as a museum at all. There are few text labels stating scientific or historical facts, houses a small collection and the majority of the space is dedicated to the visitor having a physical or aesthetic experience. What the City Museum does provide a lot of is something I believe all successful museums provide: opportunities to spark a

visitor's sense of wonder. A museum's job is not to merely provide the visitor with facts but to help museum participants find their own spark of motivation to seek out, examine, and make decisions on what they consider the facts themselves. Wonder can bring about that motivation.

The City Museum is the creation of artist Bob Cassilly and is truly a space "where the imagination runs wild." The museum is dripping with mosaics made of recycled industrial castoffs found within the city limits. Inside a mosaic of activities and spaces, including a working circus which performs and provides workshops for underserved communities, a glass blowing studio for working artists, man made caves with sculptural elements hidden behind every corner, and the "Skateless Park:" where you can try out gravity defying skate ramps without a skateboard.

All of these unique and varying experiences provide opportunities for wonder for young and old, driving visitors to leave with a thirst to know how to build a skate ramp, try out glass blowing for themselves, or create their own city museum in their backyard. Wonder can be in the display of a whale skeleton that stretches across the ceiling, a shard of pottery created by hands long ago and far away, or in a whole museum of climbable planes, mermaids and acrobats.

Kim Koin, Lead Educator and Developer, Visual Arts; Chicago Children's Museum

■ スイス・ベルン自然史博物館

世界遺産に指定されている街、ベルン市。アインシュタインが住んでいた街でも有名である。ここに強烈なアーティスト



の個性で、ナチュラルヒストリーを魅せている自然史博物館がある。サイエンティストとアーティストが火花を散らし合いながら織り成す展示デザインには、伝えるパワーがある。専属のアーティスト、クロード・クーン氏のデザインは、単なる博物館デザインに留まらない。展示のどこを切り取っても見事なアートになる細やかさが心地いい。色使いも空間のセンスも、彼の哲学が鼓動を打つ。

それはモーツァルトを聴いているいる感覚である。

私にとってベルン自然史博物館は、科学と芸術が生き生きと融合しているいつでも訪れたい大切な博物館である。

日本大学藝術学部 教授 木村 政司

■ 山の中での予期せぬ出会い～デンバーアートミュージアム～

米国博物館協会の年次大会 2008 が開催されたために、ロッキー山脈で有名なコロラド州の地を踏んだ。山の中の街、山の中のミュージアムと想像していたが、デンバーのミュージアムの質の高さには驚かされた。とりわけ、デンバーアートミュージアム (DAM) は、これまで訪れた美術館の中でも博物館教育のハート&ソウルがあふれていた。ここで研修をされた鈴木みどりさん (東京国立博物館) に案内を頂き、何種類もあるバックパックキットの中身を全て空けて楽しんだり、年甲斐もなくロデオの模型に乗ったりと、人生に残る体験となった。一人で行くのもいいけど、やはりミュージアムは



共に分かち合う人がいるのがいい。みどりさん、本当にありがとう。展示の端々に、大人向け・子ども向けのセルフガイドやパズルが置かれ、さまざまな工夫がなされている。教育ツールを展示室内におくとノイズが入るという意見もあるが、美術館でここまで子どもたちに「どうぞ存分に楽しんで」と言える DAM はすごい。さらに、その真髄を見せつけているのが、アートピースの中に描かれている花を、そっくりそのまま鑑賞者の脇においてしまうこの演出であろう。写真の絵画に描かれている花と花瓶の花に注目！みどりさんの師匠パティ・ウィリアムさんのアイデアだ。是非、山の DAM へ。

九州大学ユーザーサイエンス機構ミュージアム研究会 清水 麻記

■ モントレー湾水族館 (アメリカ)

私が初めてモントレー湾水族館を訪問したのは平成2年のことだ。これまで、海外の水族館と言えば香港オーシャンパークしか知らなかった私は、すでにこの時に「世界一」との評判であったモントレー湾水族館に大きな期待を寄せて訪問した。その時の感動は想像をはるかに越えており、そのすごさは一言で表現できない。あえて言うならば、生物の「ここを見せたい、ここを伝えたい、ここがすごい」を伝えるための工夫が、全館にあふれている水族館ということだ。その展示の実



現のために、「どんな形状、構造の水槽で、どのように飼育展示し、どのように解説し楽しんでもらうか」を徹底的に議論追求していること。研究者、飼育者、デザイナー、教育担当者、経営者が連携し、それぞれの得意分野を100%発揮した成果だろうことは想像できた。しかし、館にどのようなシステムや運営があればこの展示が可能になるのか、水槽を巡るたびに、頭の中には羨望とため息、感嘆符が飛び交った。私にとってモントレー湾水族館は、一気に世界一のアコガれの水族館になった。以降私は、数年毎に訪問しては大いなる刺激を受けているが、水族館の未来形として、今でも私の大きな目標であり続けている。

マリンワールド海の中道 高田 浩二

■ ダイノソア・ファクトリー

これまでの恐竜の展示というのは、どちらかという分類学的な展示が多かったと思うのですが、この博物館の展示は化石の発掘から分析・研究まで、研究者の立場でのプロセスを追体験できるものでした。モンゴルでの厳しい環境の中で発掘隊の生活の再現と同時に、地面に現れたサウロロフスの骨格について、それがそこに横たわる成り行きについての様々な角度からの考察の再現は、とても興奮させられるものでした。

そして持ち帰られた標本を、研究室においていかにして骨格標本にするのか、骨格の復元のための解剖学的な分析や、骨格標本の組み立てのプロセスが再現されていて、研究者の仕事を理解できる展示でした。展示室に散りばめられた研究者のメモがとてもリアルで、共感させられました。

細部までメッセージの行き届いた展示というのはなかなか出会うことができないものです。期間限定のテーマ展示だからその集中力と、十分すぎるほどの準備・検討の深さを感じました。いろいろな制約がある中で、これほどの完成度の高い展示を生み出すことができたスタッフの皆様を、学芸員としてうらやましく感じ、また賞賛したい気持ちです。

関西博物館研究会 田中 広樹

■ ボストン科学博物館

チャールズ・イームズは、アメリカを代表するデザイナーであるが、サイエンスコミュニケーターの草分けでもあった。最新のテクノロジーを活かしたデザインが多いだけでなく、デザイン以外にも科学的事象を可視化する多くの秀作を残している。



「パワーズ・オブ・テン（1977）」という宇宙の果てから原子核の世界に至るまでをワンショットズームで見せるというショートフィルムをご覧になった方も多いと思う。ボストン科学博物館には、イームズ夫妻が1961年にIBMのスポンサーで制作した「マスマティカ展：数の世界…そしてその向こう」という数学の歴史や理論についての展示がある。先日偶然に訪問した時、現在もその展示が生き続けていること、そして47年も前のコンテンツが未だに多くの人々を惹き付けていることに非常に驚いた。

壁には数学に関する発見の大きな年表がある。グラフィックが非常に見やすく、楽しい。「確立」の展示では上からボールが落ちて来てパチンコのような杭をすり抜けると見事に左右対称の曲線が目の前で作られていく。写真は、H型の曲線の穴をすり抜ける赤い直線の棒。ヒントは左のワイヤーで作られた立体。この動く展示からしばらく動くことができなかった。

九州大学芸術工学研究院人間生活システム部門 准教授 平井 康之

■ 西宮市貝類博物館

1995年1月17日、西宮市は阪神・淡路大震災にみまわれました。震災からの復興の中で、1999年、西宮市は人工島に安藤忠雄氏設計による貝の博物館を作りました。建物は、中庭に置かれた堀江健一氏のヨット（マーメイド号）をイメージしたユニークな形です。西宮市は、日本の貝類学の生みの親である故黒田徳米博士が晩年を過ごした所です。博士の収



集した膨大な標本と文献が市に寄贈されたことをきっかけとして、人々、特に子供たちが自然に親しみ、希望に満ちた人生へ向かって力強く歩みだすことを願って建てられたものです。

貝類館は、3名の学芸員と数名の非常勤職員によって運営されています。阪神貝類談話会との密接な連携により、学童や一般社会人のほか、西日本の貝類研究者にも良く利用されています。館では、所蔵標本や文献の目録作りによって、利用しやすい環境を整えると共に、寄贈の受け入れを積極的に進めています。創設以来10年足らずですが、博物館資料は年々充実し、関東地区の国立科学博物館貝類研究室に匹敵する、西日本地区の研究拠点ができようとしています。

九州大学総合研究博物館 松隈 明彦

■ 旭山動物園

仕事柄、動物園・水族館にはよく行くのですが、何を展示しているのかよりも、どんな展示をしているのかが気になります。私の心にのこったミュージアムのひとつに、かの有名な旭山動物園があります。メディアではアザラシが筒型の水路



を通り抜けたり、ホッキョクグマが陸上から水中に飛び込んだりと、生き生きとした姿が映し出されます。しかし私の心に強くのこっているのは動物ではなく、ホッキョクグマ館の通路の横においてあるポリタンクでした。家庭でも灯油入れなどによく使われているタンクですが、噛み跡やへこみが激しく、見るも無残な姿です。タンク横の解説によると、ホッキョクグマのイワンが噛んだとのことでした。

檻やガラスの中で起こっていることは観覧者にとっては所詮向こうの世界のことであり、どこまで動物を感じているのだろうかをよく思います。このポリタンクはその感覚の溝を埋め、動物の力をより身近なものとして捉えることができるアイテムではないでしょうか？旭山動物園の人気の秘密の一つを見た気がしました。

—— マリンワールド海の中道 三宅 基裕

■ あこがれのアメリカ自然史博物館

ぼくが初めて訪れた本格的な自然史博物館はニューヨークにあるアメリカ自然史博物館。20代半ばのことだった。そこでの出会いでもっとも感激したのは、恐竜ではなく、ドードーの剝製。まったく予想外の出会いだっただけに感激もひとしお。

しかし、どうにも腑に落ちない。なぜなら、ドードーの剝製はどこにも存在しないと聞いていたからだ。世界にただ1つ残されていたオックスフォード大学の剝製は、19世紀に焼却処分されてしまったはずなのだ。



推定に基づく復元模型だったのだろう。その後何度も再訪しているが、あのドードーにはついぞ再会できなかったためしがない。よもや焼却処分されたということはないだろうが。

アメリカ自然史博物館でもう1つ感激したのは、きわめてリアルなジオラマである。写真に撮ると、本物の野生動物の写真と見分けがつかない。日本の地方都市にある郷土資料館などに並べてある貧相な剝製とのなんという違い！

夕焼けを背景に飛ぶフラミンゴの展示を見ていただきたい。赤い羽色は、夕焼けにまぎれるための保護色だという奇説も信じたくなくなるというものだ。

—— 博物館巡礼者 渡辺 政隆

■ 九州大学総合研究博物館

手前ミスですが、九大の総合研究博物館を紹介します。実際のところ、私にとっては一番印象深い場所になりつつあります(専任教員なので、当然ですが…)。最近(2008年5月8日)、新しい展示室がオープンしました。福岡市東区箱崎のキャンパスにある、大きな工学部本館という建物の、3階にあります。どこにあるのか、非常にわかりにくいと言われていました。探し探し、是非お立ち寄りください。苦労してたどり着いた展示室は、また格別です。もとは大講義室で、傾斜のあった教室の床を、3段に分けて平にし、展示エリアにしつらえています。この段差が、意外にも、展示室全体に立体感を作り



出しています。そして、なにぶん学内にある標本数は非常に多いので、そのごくごく一部を展示しています。1分野1ケースくらいです。生物系と非生物系で、だいたい200点ほど展示されています。魚と昆虫と植物の生体展示もあります。

これから6月6日までは、ほとんど無休で公開しています(5月25日のみお休み)。期間中、13時から17時までの間オープンしています。国際博物館の日の18日は、九大総合研究博物館のオリジナルポストカードをお配りする予定です。

—— 九州大学総合研究博物館 三島 美佐子

クジラとぼくらの物語

～クジラと、もっと、なかよくなろう～

USER SCIENCE INSTITUTE MUSEUM PROJECT

<http://www.usi.kyushu-u.ac.jp/blog/children/kujira.html>

<http://www.cm-kujira.jp/>

クジラとぼくらの物語

— 海とわたしたちのこれまでの物語・これからの物語をできるだけ多くの人と一緒につむいでいきたい。 —
そんな思いから、わたしたち九州大学ユーザーサイエンス機構ミュージアム研究会は「クジラとぼくらの物語」展を始めました。
偏見・差別・地球環境問題などのように、特定の博物館ではあつかいにくいテーマをあえて取り上げることで
未来をになう子どもたち・大人たちと一緒に考えていくきっかけをつくりたいと考えています。

「地球最大の生物・クジラ」

そのひとつをとりあげても、伝えていきたい物語がたくさんあります。

過去に忘れ去られてしまいそうな物語、そして現在おこっている物語を共に語っていくことで
未来をつくりあげていくことができるのではないかと信じています。

巡回展開催地予定 マリンワールド海の中道／6月6日～6月20日（福岡）、大阪海遊館マーケットプレイス（大阪）
太地町立くじらの博物館（和歌山）、水産庁（東京）、座間味（沖縄）

主催／九州大学ユーザーサイエンス機構 展示監修／山田格（国立科学博物館）、細田徹（勇魚文庫） 後援／福岡市教育委員会

特別協力／高田浩二（マリンワールド海の中道）、田島木綿子（国立科学博物館）、河野央（久留米工業大学）、
平井真美子（ピアニスト／作曲家）、松田淳作（元アナウンサー）、新口葉子

協力・関係機関／国立科学博物館、勇魚文庫、日本セトロジー研究会、熊本大学、長崎大学、日本鯨類研究所、日本捕鯨協会、日本小型捕鯨協会、
くじら資料館、宇仁自然史歴史研究所、島の館、南楠町鯨船保存会、A.I.R. デザイン研究所、ドルフィンクラブ TAG、
太地町立くじらの博物館、九州大学総合研究博物館、九州大学農学部、Varietas、座間味村ホエールウォッチング協会、
株式会社 山九、座間味村、福岡市立和白小学校、福岡市博物館、NPO 法人子ども文化コミュニティ、
座間味村教育委員会、NGO 法人ウーマンズフォーラム魚、マリンワールド海の中道、
通公民館、名護博物館、徳家、ほっちゃテレビ、沖縄リゾート、長崎歴史文化博物館、
財団法人南西地域産業活性化センター、（順不同）

総合・展示企画／清水麻記（九州大学 USI ユーザーサイエンス部ミュージアム研究会）、
黒澤茂樹（ミュージアム研究会デザイナー）